

# サブプライム危機に巻き込まれた本邦ケインズ学者

新訳ケインズ『雇用、利子および貨幣の一般理論』（岩波文庫、二〇〇八年）の内実

米 倉 茂

はじめに

1	ケインズ・ランチのスターターは「イチジクの葉」	156
2	株を「実物資産」、債券を「債権」と訳す曲芸	159
3	相場の“position”の読み違い	161
4	ベア・ポジションにあったケインズは「弱気筋」ではない	162
5	宇沢弘文と間宮陽介の一騎打ち―株と社債の区別もつかない両者は引き分け	164
6	「金融危機」の内容も知らないで「金融危機」を解題	166
7	「利子率複合体」なるお化け―「債権」と「債券」の区別がつかず中央銀行の公開市場操作の中身も知らないで流動性選好概念は語れない	168
8	「空想的な感情の激発」に駆られ「割り引き」の意味の取り違え	171
9	ケインズは「借入金」なしの投機を戒めた?	172
10	間延びしてしまった「美人投票」	174

11	「長期期待」がおよそ不可能な「第12章 長期期待の状態」の意味不明の訳	175
12	インカムゲインとキャピタルゲインの「計算」が「あて」にならない「あてにする」(calculate)を「計算」と勘違い	178
13	投機への「偏愛」(weakness)を「弱点」と正反対に誤訳	179
14	「投機」の意味をとり損ね、「泡沫になってしまふ」翻訳の「投機家」	183
15	証券用語も知らないで訳してはいけない	185
16	歴史をねつ造する訳注―ケインズとロバートソンの関係の真相の隠ぺい工作	187
17	下世話の好きな訳者	190
18	提灯書評に興じる経済学者、経済新聞編集委員	191
19	むすび―エンロン事件の二の舞で飛び交う「イナジクの葉」―債務を債権として偽装表示	193

## はじめに

神よ、彼らを許し給え、彼ら自身の為せることを知らざればなり……(ルカ伝第二三章)

近年、国際金融市場を震撼させていたサブプライムローン問題。米国で支払い能力が高くない人々に次々と住宅ローンが組まれ、これが証券化され高格付け金融商品として世界中にばらまかれた。元になるローンのリスクが高いのだからサブプライム関連証券もリスクが高いはず。当然の帰結ではあるが、この金融加工商品は住宅ブームの

終了とともに暴落し値もつかない状況に陥った。高格付けの幻想が消え去ったのである。

日本のケインズ学者はこれを他人事として受けとめるわけにはいかない。頻発する商品偽装問題と同じ構図が繰り返されている。具体的にいえば今回のケインズ劇場に登場する日本のケインズ学者の実像のことである。ケインズの世界的に有名な著書、『雇用、利子および貨幣の一般理論』の翻訳は戦後から現在に至るまで、およそ信じられない誤訳で塗り固められている現実は何ら変わらない。

ケインズの生誕百周年が一九八三年。同年末、それにあわせて『雇用、利子および貨幣の一般理論』も再訳された（東洋経済新報社から。訳者は塩野谷祐一）。再訳されたからには最初の訳（訳者は同じ塩野谷祐一の父の塩野谷九十九）よりも正確にわかりやすい日本語になっているはず。ところが実際はその反対である。そのことは巻のケインズ学者の間では周知の事実であつたはずであるが、それを是正する気配もなかった。ようやくこの二〇〇八年、間宮陽介（京都大学教授）による新訳が出現した（宇沢弘文の解題付き、岩波文庫、上、下、二〇〇八年、以後の引用は上・\*\*頁、下・\*\*頁とする）。

たしかに新訳の場合、文が格段に読みやすくなっている。しかし、ケインズの指摘するとおり、「きれいでお上品なテクニクはすべて崩壊しやすい」。サブプライム関連証券が妖しげな根拠から高格付けされたことと同様、今回の新訳の内容は意味不明の箇所だらけなのに評価が高い。

先行する塩野谷祐一訳で曝された無理解が今回の新訳でも拡大再生産されている。翻訳もさることながら解題もおよそケインズの主張とはほど遠い記述だらけ。翻訳者・解題者は日本では名高いケインズ研究者のほうである。サブプライム関連証券の高格付けがたちまちのうちにメッキがはげて世界的金融危機を引き起こしたのはつい最近のことである。金融商品の評価は市場原理に曝されるのでいづれ調整が起ころ。ところが日本の「ケインズ学者」の世界では疑わしい高格付けがまかりとおる。学問の世界でも格付けは厳正であるべきなのに。

本論で明らかにするとおり、「債券」を「債権」としたり、株式発行を企業の負債発行とする等、およそ経済学の常識以前の話が飛び出す。特に「美人投票」「投機」でよく引き合いにされる「第二章 長期期待の状態」は肝心の箇所が全部まちがっている。

原因は簡単である。基本的な証券市場論を理解していないこと。そしてケインズが参照指示した文献も読んでいないこと。ケインズの経済学を理解する場合、金融論の基礎が欠かせないが、それを全く欠いている。それが日本における『一般理論』翻訳本なのである。しかも翻訳しているのは有力大学の名だたる教授達である。今回その衝撃的内容をトピック別に明らかにしていく。経済学に興味のある読者には予め警告しなければならない。あまりにおかしくて腹がよじれないように。

## 1 ケインズ・ランチのスターターは「イチジクの葉」

まず日本のケインズ学者の翻訳力の程を示すための格好の前菜がある。無花果ならぬ「イチジクの葉」の逸話である。第二次大戦終了直後の一九四五年秋から冬にかけて、ケインズは英国が米国から大量の援助、借款を引き出すべく対米金融交渉に従事していた。同年一月七日にケインズは「イチジクの葉」にひっかけて本国に次のように打電した。

ロンドンの老婦人達のお眼鏡に適うような提案は、イチジクの葉が、一段と厳しくなる気候の中で枯れてしまい恥部を隠す役を果たせなくなるように、英米交渉を取り巻く環境が厳しくなっている状況では恥部をさらけ出すだけであり、米国に通用するはずがない

これはかなり意識している。そうしないとケインズと本国政府のやりとりが訳出できないからである。原文は次のとおりである。

Some fig leaves which may pay muster with old ladies in London wilt in a harsher climate (JMK. 24, p. 584) \*

ところが日本の名だたるケインズ学者達はそれを次のとおり、世にも奇怪な訳をしてくれた（かの中山伊知郎が選出した学者による訳本は東洋経済新報社ケインズ全集二四巻、六二三頁）。

いくつかの些細な点が残りますが、これはさらに厳しさを加える環境の中で元気を失っていくロンドンの老婦人（イングランド銀行）で十分に間に合うでしょう

### ■「イチジクの葉」の変容

見られるとおり、ケインズ学者の理解では「イチジクの葉」(fig leaves) の leaves が動詞 leave の三人称単数現在の意味に化けてしまった。では肝心の「イチジク」はどうなったのか？「些細な点」へと加工された。この結果、「イチジクの葉」(fig leaves) は「些細な点が残ります」に変容してしまった。

これが日本のケインズ学者の英語力なのである。中学生程度の英語力もない。文脈からすれば「イチジクの葉」であることは明らかなはずであるが、このたとえば訳者には理解できない。これではケインズが皮肉をこめて一体何を本国政府に伝えたかったのか何も理解できなくなる。実はこれを翻訳した方に筆者は自身の学会発表（二〇〇六年一〇月金融学会・全国大会・大阪大学）におけるコメンテーターをお願いした。その方は誠実なことに不適切な訳に関しきちんと公の場で謝罪された。実に高貴な感動的な姿勢だろう。だから本論ではそれ以上の話はしない。

問題は本邦ケインズ研究ではそういう問題があることを知ってか知らずか、平気でケインズを賢しらに語るケインズ学者が跡を絶たないことである。

一応ここでは「イチジクの葉」に込められたケインズの皮肉の本意を紹介することにとどめる。本国政府は保護貿易を維持しながら米国から大量の援助、借款を獲得するようケインズに指示していたが、米国は英国が貿易自由化の方向に同意しないかぎり援助はおろか借款も与えない強硬な姿勢だった。にもかかわらず英国政府はケインズに対し、英国は保護貿易、為替管理はしていない、それは戦時中の暫定的処置にすぎないという文書を書くよう指示していた。このような詭弁を弄する本国政府にケインズは怒った。だから本国政府の指示を「イチジクの葉」呼ばわりした。

ケインズを読む醍醐味はさらに別のところにある。イングランド銀行のあだ名は所在地にちなみ、「スレッドニードル街の老婦人」(Old Lady in Threadneedle Street)である。それがケインズの文書では「ロンドンの老婦人達」(Old ladies in London)になっている。ここにはケインズ一流の鋭い棘の皮肉が込められている。古臭い本国政府の考えの本源はイングランド銀行にあり、それに英国大蔵省が同調してしまった。大蔵省はケインズの味方だったはずなのにいつの間にかイングランド銀行の古臭い考えに染まってしまった。だから「老婦人」を「老婦人達」へ、「スレッドニードル街」を「ロンドン」へとケインズは置き換えたのである(詳しくは拙著『落日の肖像―ケインズ』イブシロン出版企画、二〇〇六年、一八四―九三頁)。

さてケインズ・ランチのスターターの「イチジクの葉」を読者は賞味していただけただろうか? 次はメイン・ディッシュである。そこでは株の料理が出る。そして株とくれば、牛(ブル)も熊(ベア)も出る。まさにフルコースである。ところが新訳『一般理論』の訳者はコース・メニューも見ないで食事する。当然、学問上のフォークとナイフの使い方も知らない。ナプキンは口をふさぐ学問的沈黙のために使われる。

## 2 株を「実物資産」、債券を「債権」と訳す曲芸

まず強気になっている翻訳者には「弱気の状態」の話を提示する。次のような訳は完全に間違っている。そして株が「実物」資産」と訳されていることに筆者は言葉も出ない。

投機的動機による流動性選好は、私が『貨幣論』で「弱気の状態」と呼んだものに相当するが、決してそれと同一のものではない。というのは、『貨幣論』では「弱気」は、利子率（あるいは債権価格）と貨幣量との関数関係ではなく、『実物」資産と債権を一括したものの価格と貨幣量の関数関係として定義されているからである。このようなやり方だと、利子率の変化がもたらす帰結と資本の限界効率表の変化による帰結とを一緒にたにすることになる。『貨幣論』と違って）ここではその弊を免れることができたと思う（上・二四一頁、〔）部分は間宮が挿入、下線は引用者が付す）

この訳で気のこと。下線部分は初歩的誤りである。そこでどのように誤っているのか、拙訳を提示しておく（翻訳者・間宮の居直りを許さないよう原文も掲載）。

### 拙訳

投機的動機に基づく流動性選好は、私が『貨幣論』の中で「株価下落に賭ける投機の状況」(the state of bearishness)と呼んだものに対応しているが、それはけっして同じものではない。なぜなら、そこでは「株価下落に賭ける投機」は利子率（または債券の価格）と貨幣量との関数関係としてではなく、株という資産 (assets) と債券 (debts) とを一括した価格と貨幣量との間の関数関係として定義されたからである。しかし、このように扱ったために、金利が変化することによって生じる結果と資本の限界効率性が変化して生じ

る結果とが混同されてしまった。それを私はここでは取り除けたと思っている（流動性選好を利子率変化の効果に関して論じる場合、この章では、もっぱら債券価格変動との関係を論じ、株の話ははずしているというわけである―筆者の解題）

原文

Whilst liquidity-preference due to the speculative motive corresponds to what in my *Treatise on Money* I called 'the state of bearishness', it is by no means the same thing. For 'bearishness' is there defined as the functional relationship, not between the rate of interest (or price of debts) and the quantity of money, but between the price of assets and debts, taken together, and the quantity of money. This treatment, however, involved a confusion between results due to a change in the rate of interest and those due to a change in the schedule of the marginal efficiency of capital, which I hope I have here avoided (JMK. 7, pp.173-4)

■『貨幣論』も読んでいない

ケインズの原文を照らし合わせれば、拙訳と間宮訳ではどちらが正確な訳出にできているのか読者には判断していただけるはずである。まず致命的な誤訳を指摘する。「〔実物〕資産と債権を一括したものの価格と貨幣量」という訳に相当する原文は掲載に示すとおり、'between the price of assets and debts, taken together, and the quantity of money.'である。この点について、ケインズは自著の『貨幣論』を参照するように指示している。しかし間宮はそれを参照していない。なぜなら、株式のことを「〔実物〕資産」と訳出できるような文をケインズは『貨幣論』で全然書いていないことに間宮は気づいていないからである。



ではどのようなことが『貨幣論』で書かれているのか？それを確認しよう。ケインズはそこにおいて、一九二八～二九年のニューヨーク株式ブーム時の金利と株価の関係のことを論じ、金利は高騰していたが株式ブームに乗じた信用買いが盛んであり、その一方で株の信用売りも膨らんでいた状況を考察している。この二つの信用買い、信用売りの投機が拮抗している状況を‘bull-bear’ positionと呼んでいる (JMK. 6, pp.175-7)。

間宮の訳に出ているような「[実物] 資産」の話は何も出てこないのである。にもかかわらず、間宮は「」という解題までつけてしまった。『一般理論』の原著者のケインズが『貨幣論』の該当箇所を参照するように指示しているのに、間宮はそれとせず、さらにお節介なことに間違った解題まで付し、株式のことを「[実物] 資産」と誤訳してしまった。

間宮がケインズの参照指示に従わなかった代償はこれに尽きない。もし、間宮がケインズの『貨幣論』の該当頁を参照していれば、ベア・ポジションを「弱気の状態」、ブル・ポジションを「強気の状態」と誤訳することはされただのである。またケインズの参照指示にしたがっていれば債券のことを「債権」と誤訳することもなかったはずである。

### 3 相場の“position”の読み違い

信用取引における“bull”、“bear”の「ポジション」を「状態」と訳してしまうとケインズの「流動性」概念は理解できるはずがない。日本におけるケインズ学者全般の通弊であるが、彼らは実際の意味もわからずに、“bear”を「弱気筋」、「bull」を「強気筋」と訳してしまい、その内容がわかったつもりになっていた。今回、間宮陽介も同じ轍を踏んでいる。

“bull”、“bear”は先物信用取引に使われることばである。ここでは株を例にする。将来株が下がると読む投機家はそれを先物で売る契約をしておく。先物売り約定が未決済になっている状態が「売りポジション」(bear position)である。株が上がると読む投機家はそれを先物で買う契約をしておく。この先物買約定が未決済になっている状態が「買いポジション」(bull position)である。この信用取引において売りの額が買いの額を上回っている状態になると相場は下落する傾向になり、逆の場合、相場が上昇する傾向になる。

したがって「ポジション」を「状態」と訳してしまう間宮は有能な投機家にはなれない。なぜなら、まさに“position”を読み違えた投機家だからである。

#### 4 ペア・ポジションにあったケインズは「弱気筋」ではない

ところで“bear”、“bull”について再度、復習しておく。実はこの復習内容が掲載された拙稿は間宮に献呈されていたのであるが、間宮からは何の反応もなかった。その関連箇所を読んでおけば、今回のような失態を曝さなくてすんだのである。学者は謙虚でなければならない。紙面の都合上、典拠は明示しないが、“bear”、“bull”に関して、英国銀行協会推薦の本には次のとおり説明されている。

“bear”：投機家のことであり、価格が下落すると予想する株を売るが、売った時点には受け渡す株は保有しておらず、将来、その株を売った価格よりも安く買い戻して利益を出して決済する投機家

“bull”：投機家のことであり、価格が上昇すると予想する株を買うが、買った時点には株購入代金を支払うつもりはなく、将来その株を買い値よりも高く売って決済し、利益を出そうとする投機家

### ■投機に「弱気筋」は存在しない

この問題はケインズが実際に従事した“bear”にも応用できる。その場合、“bear”の対象は株ではなく、通貨である。これを「弱気筋」と訳すという意味が通らなくなるのである。それはケインズによる通貨先物取引を例に挙げれば一目瞭然である。ケインズは一九二〇年末、それまでの通貨先物売り信用取引で大損しており、通貨投機に賭ける金を持ち合わせていなかった。しかしその時、三つの通貨を先物売りする絶好の機会があった。だが彼には現金はない。だから友人のカッセルに先物取引の資金を工面するよう依頼し、その金を使い先物売りした。二〇年末の相場はケインズの読みがピタリと当たった。大損から大もうけになったのである。金もないのにケインズが通貨先物売り投機(bear)に賭けたことは「弱気筋」の行為ではない。逆に強気でないときない行為である。だからbearのことを「弱気筋」と訳出するのはおかしい話なのである。

さて簡単な復習を終えたので間宮の訳文の内容検討に戻ろう。まず指摘しておくべきこと。間宮のような「弱気の状態」という投機家はこの世には存在しない。間宮が「弱気の状態」と取り違えているものは実際は先物取引における信用売りのことである。株や債券が下落すると見て信用売りして後で安く買い戻して利益を得ようとする人々の手口のことである。株や債券が下がるという「強気」の判断で信用売りするのである。逆に間宮が「強気」と誤訳している信用買いとは、株や債券が上昇するとみて信用買いした後で高く売って利益を得ようとする人々の手口のことである。

間宮は株を実物資産と誤訳し、先物取引における信用売りのことを「弱気筋」、信用買いのことを「強気筋」という意味不明の用語を披瀝してしまった。

さて間宮のような訳のようになると「(実物)資産と債権」の「資産」と「債権」の区別は一体どうしてできるの

だろう。筆者のように「株という資産と債券」と訳さないとケインズの本意をつかめない。ケインズはわざわざ、その点を「混同」しないよう、「株という資産と債券」との「混同」を『一般理論』の作成時点で「取り除いたつもりである」はずなのに、間宮はそれが一体何のことかもサッパリ理解できず、それ以前の低次概念でも混同していたわけである。

ケインズは金利と貨幣量の関係を問題にする場合、『貨幣論』の段階では金利と株価、債券を一緒くたにして貨幣量を論じたことがまずいことに気づき、『一般理論』では金利と債券価格の関係から貨幣量の話をしたのである。

したがって、皮肉なことに、間宮はケインズの言う意味での「混同」から免れることができた。ケインズの「混同」の域に達していないのである。要するに間宮はケインズが参照を指示している『貨幣論』の該当箇所を読んでいない。ケインズ学者という間宮の学問的資質をうかがう格好の指標であろう。

ごく当たり前の話であるが、株券は会社に所属する有形、無形の資産の持ち分を表す証書のことであり、実物資産それ自身とは違う。株式は実物的資産の持ち分を表す一片の紙切れにすぎない。

## 5 宇沢弘文と間宮陽介の一騎打ち―株と社債の区別もつかない両者は引き分け

間宮は金融経済に暗いため、ケインズの『一般理論』でとんでもない誤訳をしてしまったわけであるが、間宮をいちがいに批判するのは酷な面がある。間宮が今回の翻訳における解題を依頼した宇沢弘文の理解にもおよそ常識を疑うことが多いのである。間宮は東京大学時代、宇沢の演習に参加していたのであるから、当然その影響も大きいのだろう。

宇沢も認めるとおり、ケインズの修辞は華麗であり、かつ鋭い棘がある。しかしその華麗な修辞を理解するのに

は経済学のイロハが備わっていなければならない。宇沢にそれが装備されているか否か。それは今回の翻訳「解題」を見ればすぐに判断がつく。

宇沢はケインズの世界に登場する金利生活者に関し、「企業の発行する負債を金融資産として保有し、配当や利息を収入として受けとり、生計を営む経済主体である」(下・二二〇頁)と紹介している。この文をすなおに読めば宇沢の精神世界では「企業の発行する負債」に株式も入る!! これは単なる誤植では済まされない。それは一〇頁分の手紙でも再確認できる。そこでも、「金融資産市場は、企業、政府の発行した負債を金融資産として取り引きする市場であって、債券、株式、手形、国債などさまざまな負債が、金融資産市場での取引の対象となる」(下・二二一頁)という記述になっている。まさに宇沢は株式を「負債」として扱っているのである。

### ■ケインズは株の売り禁止を提案?!

このように宇沢の精神世界では株が負債に化けている。これでケインズの流動性選好を解題できるのであろうか? もちろんここでも宇沢はできない。流動性選好に関し、ケインズを誤解しているからである。それが次の文である。ケインズは株式市場における投機が「経済循環の不安定要因となることを重要視し、株式売買に関する手数料を大幅に引き上げるとか、株式をいったん保有したら一生手放せないようにすべきである」という提案さえしている」(下・二三八頁、下線部は筆者が付す)と宇沢は解釈してしまった。

こんな「便法」をケインズが本当に主張していたとすれば『一般理論』における流動性選好説は崩壊する。間宮が訳しているとおり、ケインズは「だが少し考えればわかるように、この便法は一つのデイレンマに逢着する」(上・二二二頁)と書いている。こんなことをしたら、「新規の投資を著しく阻害するおそれがある」(同)というのである。かくて宇沢こそが「一つのデイレンマに逢着」したことになる。否、「デイレンマ」も意識できないだろう。

結局、宇沢はケインズが言及している企業の発行する証券の性格もよくわからないので、ケインズの流動性選択の意味もわからない。だからケインズが株式の売りを抑える方法を導入するよう主張していると誤解してしまった。

この点、間宮の理解の方が正しい。しかし金融資産の理解では宇沢に劣る。たとえば、宇沢の精神世界では「金融資産市場での取引の対象」には「債券」があり、「債権」は出てこない。一方、間宮では債券市場ならぬ、「債権」市場が頻出する（訳本の全体に）。さて東大の宇沢ゼミでは、債券は「債権」なのか、それとも「債券」のいずれのことなのか、統一した理解を求められる。もちろん宇沢の「債券」説が正しい。しかしその正しい理解を示した宇沢が何と株式を「負債」として扱う。こうして間宮、宇沢は両者、傷をなめ合う美しき師弟関係を披瀝してくれる。筆者が間宮、宇沢の一騎打ちを引き分けと判定する所以である。

## 6 「金融危機」の内容も知らないで「金融危機」を解題

このように『一般理論』の翻訳者は金融の基本的事項も知らずに金融に詳しいケインズに取り組んでしまった。だから金融危機の歴史的事例のことが何もわからない。にもかかわらず、金融危機の件に関し、ごていねいなことに訳注まで付してくれる。それが次の文である。

合衆国では、一九三二年のある時期、これとは逆の種類の危機——金融危機すなわち清算の危機が起こり、いくらか好条件が提示されても、保有している現金を手放そうとする者はほとんどいないというありさまであった（上・二九〇頁）

この「清算の危機」に関し間宮は訳注を付している（上・三九八頁）。すなわち、「清算の危機」とは「流動性の

低い債権資産が現金化できなくなること」だそうである。しかし実際の「金融危機」の内容はもっと深刻だったことを間宮は知らない。「合衆国」の「一九三二年のある時期」において、間宮の言う、意味不明な訳注の内容をはるかに超えた深刻な事態が進展していたのである。すなわち、銀行が倒産する事態が続出し、預金引き出しが生じる一方、銀行は現金の運用先として短期国債に殺到したのである。

### ■「清算」の実態とは？

実際の「合衆国」の「一九三二年のある時期」については、侘美光彦の労作、『世界大恐慌―1929年恐慌の過程と原因』御茶の水書房、一九九四年）で適切に叙述されている。それによれば、三二年は銀行危機の時期であり、銀行の倒産、破産が相次いでおり、これは「32年5・6月危機」「5・6月パニック」と呼ばれていた（侘美、七〇六―七頁）。三〇―三二年は全米の銀行の二二%が破産状態にあり、米国経済全体も四重の債務危機にあった。企業、住宅、農業、そして州・地方政府債務の問題である。破産した地方銀行の場合、保有する地方政府債券には値がつかない状態もあった。債券市場は二極化する傾向にあり、二流証券は暴落する一方、短期政府国債に需要が殺到した。銀行は資金運用先として短期政府国債に逃避したからである。財務省証券は三二年一〇―十一月の場合、平均金利は〇・一五%であり、これを購入する者の利回りはマイナスにさえた（侘美、七二五―六頁）。

以右のような状況は間宮の翻訳、訳注からは何も伝わらない。間宮訳のいわゆる、「清算の危機」（上・二九〇頁）とは実際には銀行の倒産・破綻のことをさす。そして、「いくら好条件が提示されても、保有している現金を手放そうとする者はほとんどいないというありさまであった」というのはマイナス金利になっても短期国債を買おうとする銀行の異常なまでの資金運用行動のことをさすのである。

金融危機の場合は必ず銀行は資金の安全運用先の短期国債に殺到する。このような状況は昨今のサブプライム

ローン金融危機の時も再現されている。二〇〇七年八月初旬の同金融危機の際、銀行間の資金調達が逼迫する中、米国短期国債の利回りは異常なまでに低下していたのである。

このような事情に全く暗い間宮であるので、実にとんちんかんな訳に終わる。「いくら好条件が提示されても、保有している現金を手放そうとする者はほとんどいないというありさまであった」となっている訳に相応する原文は、“when any one scarcely could be induced to part with holding of money on any reasonable terms” (JMK. 7, pp.207-8)であり、当時の金融危機の状況を踏まえた訳にするのであれば、「どんなにうまい条件を提示されても誰も現金を手放そうとする気にはならなかった」とした方が読者にはケインズの真意が伝わりやすいだろう。

流動性危機の場合、現金をなかなか手放さず、手元に退蔵する、あるいは超安心できる流動性の高い債券、すなわち短期国債にしか資金を運用しないという状況を伝えていないと訳文としては失格だろう。ゼロ金利、さらにはマイナス金利になっても流動性の高い債券（短期国債）に現金が逃避する異常な状況を念頭におくべきであろう。間宮はそれが全くできない。にもかかわらず金融不安の状況を語ろうとする。金融の事情に暗い者が金融不安を語る。これこそパラドシカルな意味でも金融不安の象徴的事態だろう。

## 7 「利子率複合体」なるお化け―「債権」と「債券」の区別がつかず中央銀行の公開市場操作の中身も知らないで流動性選好概念は語れない

間宮はケインズが利子率の動きを論じる場合は「貨幣と債券の代替という観点」でそうしていたと解題している（下・二五四頁）。だとすれば「債券」が「債権」になるはずがないだろう。そしてケインズのいわゆる流動性選好は利子率の動きに反応して貨幣と債券が交互に代替される状況を論じたものである。ここの箇所の間宮は自訳の「債



権」は「債券」の誤訳であると気がつくべきだった。

その場合、債券売買を通じた中央銀行による公開市場操作が重要になる。もちろん間宮はここでも大きな誤解をしている。間宮は中央銀行による公開市場操作の中身を知らないから、「利子率複合体」なるお化けを錬成してしまう。それが次の文である。

短期手形に対する単一の銀行割引率しかなかったところへ、中央銀行があらゆる満期日の金縁（優良）債券を指定した価格で複合的に売買するようになったことは、おそらく、通貨管理技術の考えられる改良の中で実務上最も重要なものである（上・二八八頁）

さてこのような日本語で中央銀行による公開市場操作が理解できるだろうか？ これをケインズのいわゆる「文明語」にしてみよう。間宮訳はケインズのいわゆる「土人語」となっているからである。

中央銀行は（以前は）短期手形に対し一つの中央銀行手形割引率（いわゆる公定歩合）しか提示できなかったが、現在はあらゆる金縁証券（政府証券のこと）を満期日の違いに対応して種々の指定された価格で売買するようになったのであり、おそらくこれは通貨管理技術面でなし得る最も重要な実用的な改善である（一）は筆者が挿入）

#### ■中央銀行が株を売買?!

もちろん間宮は何も理解していないので訳注も書けない。これは中央銀行の提示する金利が手形割引率という一つのものにすぎなかったのが、中央銀行は国債の満期の相違に応じて国債売買価格を提示して短期、長期の金利を操作しやすくなったという話である。それが原文では 'a complex offer by the central bank to buy and sell at

stated prices……」(MK. 7, p.206)となっている。しかし金融経済に音痴な間宮はその英語を「指定した価格で複合的に売買する」としか理解できないのである。

中央銀行が手形売買で金利操作するばかりでなく満期の異なる国債を売買して金利を動かそうとする話である。この場合、債券の売買はあっても株の売買は行わない。それが中央銀行であるが、間宮はこの点もわかっていない。だからケインズが『一般理論』を書いた当時の金融市場の事情も全く知らない。それを端的に示すのが次の訳文である。

……通貨当局は、大まかな言い方をすれば、貨幣と債権のディーラーであって、『実物』資産や消費財のディーラーとは違うということである(上・二八七頁、筆者が付した下線部分に注意)

ケインズは同じ章で中央銀行が「ディーラー」として国債という債券(MK. 7, p.204では debts)を売買すると書いている。そして間宮のいう、「〔実物〕資産」(原文では assets)は実際には株式のことなのである。それはすでに確認している。ケインズは中央銀行が株式はおろか実物資産を売買することなどおよそ想定していないのである。中央銀行は貨幣、そしてそれに近似した金融商品(株式は除外)を売買する金融機関だからである。

こういう中央銀行による満期の異なる債券売買によって短期、長期の金利が操作されることを理解していないので、満期の違いに応じて債券売買価格が異なることを「利子率複合体」(上・二八七頁、MK. 7, p.205、原文では The complex of rates of interest)という世にも不思議な日本語を錬成するわけである。これも致し方ない。債券のことを「債権」として訳すことが大半なのが間宮なのである。

間宮はいやしくもケインズ学者として生きていくならば金融の問題に精通していなければならぬ。間宮によれば、現代の企業はものを作るだけでなく「新たな貨幣を生むためによそから借り入れる」という「財テク」にも熱

心であり、「この意味で現代の企業」は「金融機関化している」のであり、「このような経済観は、ケインズ以前のT・ヴェブレンの経済観」であるそうだ（下・二五八頁）。だとすれば、金融に関する「この経済観」をきちんと理解していることを示す必要がある。しかし、「債権」と「債券」の使い分けもできない。そして株式を「負債」と解題して憚らない字沢に対し、「簡にして要を得た解題であり、お礼の言葉もない」（下・二五八頁）と書いてしまうようでは、一体ヴェブレンのことも理解しているのかどうか怪しくなる。もしヴェブレンがこのような間宮、字沢のような理解を共有しているとすれば経済学はとくに崩壊している。

文献考証をおろそかにした、想像力という名の妄想だけで翻訳された文献はますます神秘的性格を帯びてしまう。読者はどうしようもない迷路に誘い込まれ、原著者ケインズの声を聞けなくなる。翻訳者、特に世界的古典とされる書物の翻訳者は大きな責任があるだろう。

## 8 「空想的な感情の激発」に駆られ「割り引き」の意味の取り違え

中央銀行による貸出金利（手形の「割り引き」）の話がよく理解できていないという筆者の批判は不当なものではない。間宮は「割り引き」の意味が分かっている。たとえば、「あの人の話は割り引いて聞いておいたほうがよい」という話。日常よく交わす会話の場面に登場する。

ところが「空想的な感情の激発」に駆られてケインズ訳を敢行したドン・キホーテならぬ間宮は「割り引き」の意味がさっぱりわからない。したがって読者は間宮の翻訳は高い「割り引き」率を適用して読み込まねばケインズの真意にたどり着けない。次に引用する間宮訳でもケインズの投資理論は意味不明なのである。

人間というものは結果がすぐに現れることを望むものである。手っ取り早い金儲けにことに強い興味を示し、

遠い先に得られる利益を平均的な人間は非常に高率で割り引く（上・二一七頁）

このような訳では、寸鉄人をさすような言葉を即座に生み出す、修辭の錬金術師ケインズが台無しだろう。「遠い先に得られる利益を平均的な人間は非常に高率で割り引く」という記述でわかる読者がいたとすればそれは詐欺師にひっかかりやすい人間だろう。それを回避すべく、ケインズのな表現を次のような拙訳で提示しておく。

人間は本性上、早急な成果を求めるものである。手っ取り早く金儲けしようとすることに特に強い関心を示すものであるが、普通の場合、将来の利益が遠のけば遠のくほどますます本気にしなくなる（JMK. 7, p.157）

さて読者は間宮訳と拙訳を比較し、いずれの方が内容がわかりやすいか、すぐに判断がつくだろう。それでも判断がつかない読者は次節で紹介する間宮訳を読んでほしい。完全に間違っているのである。ケインズは投資家に対し借入を大規模にしてはいけないという話をしているのに、間宮は借入れて投機をしてはいけないと勘違いしている。

## 9 ケインズは「借入金」なしの投機を戒めた？

間宮はケインズが「借入金」なしの投機を勧めていると訳出している。それは次のとおりである。

さらに、目先の市場変動はこれを無視してかかろうとする投資家は、安全を確保するためにそのぶん大きな資金を必要とする。よし投機的取引を大規模に行うことがあったとしても、借入金をもってするなど論外である

（上・二二七頁）

これを次のとおり、「土人語」を「文明語」におきかえ、意味の通る訳にしてみる。

さらに、短期の変動を無視しようとする投資家は安全上、より多くの資金が必要となり、仮に資金を借りて投資する場合も大規模に借り入れて投資してはならない

ここは間宮の居直りを許さないために原文を引用しておく。

Furthermore, an investor who proposes to ignore near-term market fluctuations needs greater resources for safety, and must not operate on so large a scale, if at all, with borrowed money (JMK. 7, p.157)

原文を参照しながら、間宮訳と拙訳を比較すれば明らかなこと。それは間宮が投機のことを何も理解していないこと。それも当然だろう。投機の position を「状態」と、あるいは株を「実物資産」と訳した実績の持ち主だからである。さらにここでは自身の訳の記述の齟齬に気もつかない点も致命的である。

たとえば、「目先の市場変動はこれを無視してかかろうとする投資家」はいつたいどうして「投機的取引を大規模に行う」のだろう。投機とは「目先の市場変動」に乗じることだろう。逆にいえば、「目先の市場変動」を無視する人はそもそも「投機的取引」を行うはずがない。間宮はケインズが長期的投資と目先の短期的投資の特質の違いを強調して叙述を進めていることに気づいていないのである。

さらに言おう。「投機的取引」は「借入金をもつてする」ことを知らないと信用取引はできない。投機の一つの信用取引はお金を借りてレバレッジの取引をすることであり、それを投機は「借入金をもつてするなど論外である」とケインズが主張していると訳出する方が「論外」なのである。

以右、間宮の「空想的な感情の激発」による訳文の中身を紹介してきた。なお、この「激発」の話は、ケインズによるトロツキーへの批評 (JMK. 9, p.255) から借りてきたものである。ケインズのレトリックには鋼のように、しなりの効いた鋭い切れ味があり、靈感が迸るもののおおいが、間宮はそれに共鳴できない。それは次に紹介する「美人投票」に関する訳文でも如実である。

## 10 間延びしてしまった「美人投票」

ケインズの「美人投票」は有名なものである。間宮はこれを「美人コンテスト」として原文に忠実に訳出しているが、内容は原文から乖離してしまい、次のとおり、間宮びした訳に終わっている。

あるいは喩えを少し換えてみると、玄人筋の投資は新聞紙上の美人コンテスト、参加者は一〇〇枚の写真の中から最も美しい顔かたちの六人を選び出すことを要求され、参加者全員の平均的な選好に最も近い選択をした人に賞品が与えられるという趣向のコンテストになぞらえてみることもできよう (上・二一五頁)

筆者ならば次のように単刀直入に意味が伝わりやすい訳にする。才気煥発のケインズの真意に近い訳になっているはずである。

玄人の投資は、たとえたとすれば、新聞紙上の美人投票だろう。投票者は一〇〇枚の写真の中から最も美しい顔の六人を選び出し、それが投票者全体の平均的な好みに一番近ければ賞品をもらえるのである (JMK. 7, p. 156)

このように訳出した方がケインズの言いたい「美人投票」の中身がより直截に読者に伝わる。岩波文庫訳は一般の読者をも対象としている。眠気を誘う弛緩した訳文はケインズへの裏切りにもつながるだろう。

ケインズによれば、平均的な人間は平均的な好み、意見が何であるのかを探りながら美人投票するのであり、誰が本当に美人なのか問題ではなく、平均的意見が選び出す「美人」をあてることが重要である。そしてケインズはこれを株式投資論にも当てはめようというのである。残念ながら間宮はこの平均手的意見をよりどころにする「美人投票」の含意をつかみ損ねている（12節を参照）。

読者はこれくらいのことと溜息をついてはいけない。これまでの誤訳の指摘は序の口である。ケインズの修辭がよく引き合いにされる「第12章 長期期待の状態」では間宮の日本語能力が怪しまれる訳文が多くなっている。

## 11 「長期期待」がおよそ不可能な「第12章 長期期待の状態」の意味不明の訳

ケインズの文章には本来、電光石火の爆發力がある。時折、晦渋な叙述でそれが曇ることもあるが、基底としてはそれを汲み取る訳にする必要がある。翻訳者の間宮はその作業であたかも雨期の塹壕戦に陥り、泥沼の中で身動きがとれなくなる。

それが端的に表れるのが、「第12章 長期期待の状態」における第二節の最後の段落の箇所の訳文である。

投資物件の価値の変化はその期待収益に関する期待の変化のみに起因し、期待収益を資本化するさいに用いられる利子率の変化にはよらないと仮定して、記述を進めていくことにする。しかし、利子率の変化の影響を確信の状態の変化の影響に重ね合わせてやるのは容易である」（上・二〇五頁、特に下線部に注目）

これはまさに間の宮けた訳としか言いようがない。なぜそうなるのか？問宮は原文の前後もあまり読まずに塩野谷訳に上塗りした訳でお茶を濁しているからである。ここではケインズの真意が通る拙訳を提示しておく。

投資物件の価格が変化するのはもっぱらその予想収益に関する期待が変化するからであると仮定するが、この予想収益を資本還元する元になる利子率が変動するためではないと仮定して叙述することにする。しかし利子率が変動すると景気動向に関する信認の状態は容易に増幅変化してしまう (JMK. 7, p.149)

### ■「確信」は「(事業) 信認」の訳

問宮訳と拙訳を比較すればわかること。金利変動が景気動向に関する企業の心理状況に大きな影響を与えているとケインズが考えていることが強調される訳になっているか否か、一目で判定できること。なお、問宮が「資本化」と訳しているところは拙稿では「資本還元」(capitalised)と直しておく。また、「確信」は「信認」(confidence)と訳するのが一般である。たとえば「事業信認」の意味で使われる 'business confidence' を「事業確信」と訳すと文意が通じなくなることくらい、景気循環と信用の關係に関する経済報道を読めばわかることである。

本論は問宮が金利変動と景気動向との関連を何も理解できていないと厳しい批判をした。それが不当でないことはケインズの十二章の第五節の最後の段落の訳で確定できる。問宮の訳文ではケインズは一体何をいいたいのか読者はさっぱり理解できないだろう。ここでも問宮は塩野谷訳に上塗りを施しているだけなので、塩野谷訳と同様、意味がさっぱり不明の日本語になっている。

つまりわれわれは、確信の状態の別の一面、すなわち、借入れを望んでいる人たちに対する貸付機関側の確信の状態——時として信用状態とも呼ばれる——をも考慮しなければならないのである。資本の限界効率に悲惨



な影響を及ぼす株価の暴落は、投機を行うさいの確信なり〔貸付機関側の〕信用状態なりが弱まることよって起こるといっていいかもしれない。だが、株価の暴落を引き起こすにはいずれか一方が弱まるだけで十分であるが、暴落から回復するためには両者がともに回復することが必要である。すなわち、信用の弱体化は暴落を引き起こすには十分だが、その強化は回復の必要条件ではあっても十分条件ではないのである（上・二一八～一九頁）

こんな文章では読者はケインズの本が難解であると敬遠するだけだろう。しかし意味の通る訳にすればケインズの主張はきわめて単純明解な内容のものになる。それを拙訳で示してみよう。

したがって、われわれは事業信認の状態の裏面、すなわち貸出機関が金を借りようとする人々に対する信頼度の状態、時に融資姿勢（the state of credit）と称される状態をも考慮にいれなければならない。資本の限界効率に悲惨な影響を及ぼした株価暴落は、投機的な事業信認あるいは融資姿勢のいずれかが弱まったことによるものであったといえよう。しかし、暴落を引き起こすにはそのいずれかが弱まることで十分であるのに対し、回復するためには両者がともに復活することが必要である。なぜなら、融資姿勢が弱まることは暴落をもたらすのに十分であるが、融資姿勢が強まることは景気回復の必要条件であつても十分条件ではないからである（JMK. 7, p.158）

間宮のように「信用状態」と訳すと金融機関の融資姿勢の強弱の変化は何も訳出できなくなる。また事業信認を「確信」と訳すと金融機関の融資姿勢と金を借りようとする人々の関係の変化を何も伝えられなくなる。要するに景気変動の考察ができなくなる。どうやら間宮は景気循環の話も知らないようだ。

なお、翻訳への批判は公正であるべきである。ケインズの同章の第三節の訳文では問宮の方が塩野谷訳よりは幾分読みやすくなっている箇所もある(上・二〇七～八頁)。しかし問宮がケインズの強調する株式市場の意義を理解しているのか否か、それは別問題である。なぜなら問宮は証券投資におけるインカムゲインとキャピタルゲインの区別がついていないからである。この点では問宮は塩野谷と同一レベルのままである。

## 12 インカムゲインとキャピタルゲインの「計算」が「あて」にならない

—「あつごする」(calculate)を「計算」と勘違い

問宮が証券投資理論に暗いことは次に挙げる訳文を読めば一目瞭然である。

投資信託や保険会社は投資ポートフォリオの生む所得の計算だけでなく、その市場における資本評価の計算をも業務とするのがしばしばである。このような業務はふつうは節度を旨とすると考えられているが、後者〔市場における資本評価〕の短期的変動にも度ははずれた注意を払っているようだ(上・二一八頁、注(1)、「」は問宮が挿入)

このような訳が意味不明であることは次に掲げる拙訳と対照させればすぐに確認できる。なぜなら、問宮は原文にある「calculates」の意味をとりそこね、さらにケインズがインカムゲインとキャピタルゲインの比較の話をしていことに気がつかないからである。その理由は三つある。第一に、原文もよく読まず、塩野谷訳に上塗りしてお茶を濁したこと。第二に、英語を読むセンスのないこと。第三に、自身の日本語のまずさに気のつかないこと。これを問宮版三位一体という。寄り道は避け、本題に戻るため、拙訳を提示しておく。

投資信託や保険会社は投資証券のインカムゲイン (income from its investment portfolio : 株式の配当、債券の利払い) ばかりでなく資本市場における資本価値の上昇 (capital valuation : 株価と債券価格の上昇というキャピタルゲイン) をあてにすることがしばしばのことであり、このやり方は通常分別があると考えられているけれども、後者の短期的変動 (すなわちキャピタルゲイン) にあまりにも多くの注意が向けられがちである (JMK. 7, p.157 括弧は筆者が挿入)

間宮が意味不明な訳になったのは 'calculates' という「あてにする」という意味を「計算」へと「計算」違いの訳にしたからである。小学生にもわかることであるが、「投資会社」や「保険会社」が収益の「計算」をするのは別に『一般理論』で取り立てて論じることではない。収益の主因をインカムゲインに求めるのか、キャピタルゲインに求めるのかという話であり、その収益を単に「計算」するにとどまらず、キャピタルゲインに「度はずれた注意を払っている」のが問題だというのがケインズの真意である。だからこそケインズは長期的投資と投機的投資の性格の区別を強調して「第12章 長期期待の状態」を書いたのである。この区別が意識されない翻訳に終わっていることは間宮がケインズの真意を全然理解していなかったことを暴露することになる。

### 13 投機への「偏愛」(weakness) を「弱点」と正反対に誤訳

さて前節で紹介したとおり、間宮はインカムゲインとキャピタルゲインの区別がつかなかった。だから原文の第六節の最初の段落もとんでもない誤訳をしている。

実に不思議なことである。この段落における、ケインズの「投機」と「企業」の特殊な使い分けを間宮は正しく

訳出している。にもかかわらず、同じ段落の後半にすすむにつれて「投機」と「企業」の使い分けをできなくなっている。

ケインズは「投機」という言葉を市場心理を予測する活動」とし、「企業」という言葉を資産の全耐用期間にわたる期待収益を予想する活動」(上・二一九頁)としている。だとすれば、ケインズここでは投機のことを短期期待、企業のことを長期期待のこととして叙述していることになる。すると間宮が「投機がいつも企業より優勢だというのは全く事実反している」(同)という訳こそが、「全く事実反している」ことになる。ケインズの真意は「市場の心理を予測する活動」に当たる「投機」(短期期待)が「全耐用期間にわたる期待収益を予想する活動」(長期期待)に当たる「企業」よりも「優勢だというのは全く事実反している」ことを強調していることにある。

だからこそ、ニューヨークでは投機活動が盛んであり、ロンドンはその程度は弱いと描いて、両市場を性格比較しているのである。それは間宮の訳した箇所、「世界最大の資本市場の一つ、ニューヨークでは、投機の(上述した意味での)影響力は絶大なのである」(同)というケインズの主張にも明らかである。この点に関し、ケインズは「無頓着であつてはならない」と書いている。ところが間宮は「上述した意味」に「無頓着」だったので、「投機がいつも企業より優勢だというのは全く事実反している」と誤訳してしまい、「企業」に関するケインズ特有の使い分けを見過ごしてしまった。

間宮は自身の警句に自覚すべきだろう。「同じ語でも文脈が変わればその意味を変えることがある。語というものは大なり小なり文脈依存的である」(下・二四三頁、間宮による「『一般理論』に関する若干の覚書」より)。これは二重の意味で究極の至言である。実には的確な表現であること。そしてその至言を書いた本人がその至言の具体的応用でずっつけているからである。

■「投機」と「企業」は比較しようがない

「投機」という短期投資行為と「企業」という長期投資行為の違いを理解していないので、実は「美人投票」（間宮訳では「美人コンテスト」）の意味を取り損ねる。そのために実質上、すべてがまちがってしまう。そして原文の単語を「文脈依存的」に理解できない。それが次の訳である。

アメリカ人は、金融以外の領分においても、平均的意見が平均的意見だと考えているものを発見することに常軌を逸した関心を示しがちだが、因果なことに、国民性のこの弱点は株式市場に表れている。アメリカ人は、多くのイギリス人がいまでもそうしているように、『所得のため』に投資するということは滅多にないという話である。アメリカ人は、資本価値が上昇するという期待がなければ、容易に投資物件を購入しようとはしないだろう（上・二一九～二〇頁○下線部分が致命的誤訳）。

これは日本語そのものとしては特にむずかしくないが、「文脈依存的」に読むと意味は全く不明になる。それも当然だろう。これがほとんど全部がひどい間違いであることを読者に確認してもらうために当該箇所の原文を引き、次に拙訳を提示する。

原文

Even outside the field of finance, Americans are apt to be unduly interested in discovering what average opinion belives average opinion to be; and this national weakness finds its nemesis in the stock market. It is rare, one is told, for an American to invest, as many Englishmen still do, 'for income'; and he will not readily purchase an investment except in the hope of capital appreciation (MK. 7, p.159)

## 拙訳

アメリカ人は、金融以外の領分においても、平均的意見が平均的意見とはどんなものになると考えているのか、これを発見することに異常な関心を示しがちである。そしてその国民的な偏愛の当然の帰結が株式市場に見てとれる。アメリカ人は、多くのイギリス人が今なおやっているように、「インカムゲイン（配当、利子）のために」投資するということはまれであって、キャピタルゲイン（株価、債券価格上昇）の望みがないかぎり、投資物件をおいそれとは買おうとしないといわれる

さて読者は間宮訳と拙訳を比較し、どちらがケインズの意図をよく伝えているのか判断できるだろう。本論においてすでに指摘したことであるが、間宮は「for income」（インカムゲインのこと）、「capital appreciation」（キャピタルゲインのこと）の意味がつかめていない。これは証券論の基本がわかっていればすぐに理解できる話である。「アメリカ人は……『所得のため』に投資するということはめったにない」とケインズが考えるはずがない。その「所得」をすぐに増すために「アメリカ人」はインカムゲインに満足せず、キャピタルゲインの獲得に強く偏愛（*weakness*）するのである。これがわからない間宮は偏愛（*weakness*）を「弱点」として誤訳する「弱点」をさらけ出してしまった。「what average…」も理解できていない。

さらに間宮は何も理解できないので、キャピタルゲインへの投機のことを、「アメリカ人は、資本価値が上昇するという期待」という間の抜けた、意味不明な訳に陥ったのである。

しかしそのような誤りは序の口である。決定的な翻訳の「弱点」が端的に暴露されているのが「*weakness*」の意味をつかみ損ねたことであり、さらに因果応報なことに「*neeness*」の意味も取り違えてしまった。

ここまで来るともはや明らかである。間宮の「美人投票」（間宮では「美人コンテスト」の訳）に関する訳が間が

抜けていた理由が。間宮にあつては、「平均的意見」はかの「美人投票」を引き合いにして投機を論じていることが何も理解できていないのである。投機を「アメリカ人」の国民性の「弱点」としてしまつてはケインズ翻訳家としては失格なのである。間宮を待つてゐるのはアダムとイブの行き着く所。しかし間宮の場合、知恵の象徴のリングもかじれない。かわりに、イチジクの葉が必要となる。枯れたイチジクの葉であるが。間宮はケインズ学者としての confidence が問われているのである。間宮は confidence man の訳も辞書で調べることである。メルヴィルの有名な小説も同じタイトルである。

#### 14 「投機」の意味を取り損ね、「泡沫になつてしまふ」翻訳の「投機家」

アメリカ人の投機への「偏愛」を「弱点」と誤訳してしまつた「因果」は大きな代償を伴う。ケインズ特有のレトリックが理解できないまま、高校生的教科書的訳をすると大変なことになるという例を示しておこう。それが次の訳である。

投機家は企業活動の堅実な流れに浮かぶ泡沫としてならばあるいは無害かもしれない。しかし企業活動が投機の渦巻きに翻弄される泡沫になつてしまうと、事は重大な局面を迎える。一国の資本の発展が賭博場での賭け事の副産物になつてしまつたら、なにもかも始末に負えなくなつてしまふだろう（上・二二〇頁）

これがほとんど全部がひどい間違いである。これを確認するために、当該箇所を原文を引き、次に拙訳を提示する。

原文

Speculators may do no harm as bubbles on a steady stream of enterprise. But the position is serious when enterprise becomes the bubble on a whirlpool of speculation. When the capital development of a country becomes a by-product of the activities of a casino, the job is likely to be ill-done. (JMK. 7, p. 159)

拙訳

投機家が enterprise (資産の全存続期間にわたる予想収益を予測する活動) という静かな流れに浮かぶいくつかの泡 (bubbles) にすぎないかぎり何の害も与えないだろう。しかし、資産の予想収益を予測する活動が、渦巻く投機の中に浮かぶたった一つの泡沫 (the bubble) になると、事態は深刻となる。一国の資本形成が賭博場の活動の添え物 (a by-product) になった場合は、ことはまずくなるだろう。

結局、間宮はケインズの修辭を何も理解できていない。enterprise の中で投機がいくつかの bubbles にすぎない場合と、投機の渦の中で enterprise がたった一つの the bubble になっている修辭をケインズは用いている。しかしながらこの修辭は間宮には高等すぎるようだ。‘enterprise’を単に「企業」と誤訳している間宮にとって、ケインズが短期的投機的投資と長期的安定的投資を比較していることに気がつかないのも当然だろう。そしてこれを米国と英国、あるいはキャピタルゲインとインカムゲインに対位方的に論じていることも間宮には高等すぎる表現のようだ。まさに weakness 本来の意味そのものだろう。



## 15 証券用語も知らないで訳してはいけない

ケインズは投機取引の愛好者であった。だからケインズを訳す時は証券市場の用語をひととおり知っておく必要がある。そうでないと次のような意味不明な訳が出現する。

ロンドン証券取引所での取引にともなう①場内仲買人の②「利ざや」、高率の売買手数料、それに大蔵省に納付すべき重い③移転税——これらは市場の流動性を十分に低下させる働きをし（④隔週決済の慣行はそれとは反対のはたらきをするけれども）、ウォール街に見られるような取引の大部分を不可能にしている。合衆国における⑤投機の企業活動に対する優勢を緩和しようとするなら、政府がすべての取引に対して相当額の③移転税を導入するのがさしあたり考えられる最善の策ということになるかもしれない（上・二二二頁、○番号と下線は筆者が付す）

これは間宮がケインズの時代の証券市場の考証をしていないことが一目瞭然の訳文である。まず①の「場内仲買人」は意味不明の訳である。この訳文に対応する原文のジョバー(Jobber)は英国特有の用語であり、株式ディーラーのことである。そして間宮が②「利ざや」と訳している原文は「turn」であるが、これは株式売買価格の差のことである。文脈からすれば、「利ざや」では意味不明となる。ジョバーという株式ディーラーは、顧客の株の売買を取り次いで手数料を稼ぎ自身の資金を投じない株式ブローカーと違い、自身の勘定で株を売買する。買った株が売れなくなる時のリスクを転嫁するために売却価格はその分高くなる。またそのために買い入れ価格もできるだけ値切る。したがって取引は回転が付きにくい。だから英国の株式市場は米国のそれと違い一般のイギリス人にとって近付き

にくいとケインズは説明しているのである。

③の「移転税」としている原文 transfer tax は日本では譲渡税にあたる。間宮はこの点もさっぱり理解していない。したがってケインズが括弧で記している④の「(隔週決済の慣行はそれとは反対のはたらきをするけれども)」の意味がわかるはずがない。これだけを読んでも読者には理解できないはずである。だから訳注を付すべきであるが、間宮にはそれはできない。

では間宮に代わって④に関し、解題しよう。「(隔週決済の慣行はそれとは反対のはたらきをするけれども)」というのは隔週決済であれば証券投機を助長するということを指している。たとえば株を買う人は二週間の間、金を払う必要がなく、株を信用売りする人はその間に株を引き渡す必要がない。信用買いた人は決済日までに株が上があれば売ればよい。信用売った人は決済日までに株が下がれば買い戻せばよい。株や現金がなくても取引ができる。だからケインズによれば、ロンドン証券取引所は一般に投機抑制的であるが、隔週決済制度に限って言えば投機行動を助長するというのである。

こういう点を訳注に付さないと読者にとって、「(隔週決済の慣行はそれとは反対のはたらきをするけれども)」という記述は何のことやら理解できないのである。訳者はそれなりの経済学的素養を求められるのである。間宮は経済学者のほずである。

⑤の訳もひどい。「投機の企業活動に対する優勢」では何の意味かわからない。株式投資の場合、投機という短期的投資活動の方が enterprise という長期投資活動よりも優勢になると証券市場は健全に発展しない。これがケインズの主張なのである。

間宮が以右の証券用語に関し何も理解できなかったのも驚くべきことでない。13節で明らかにしたとおり、間宮は「投機」の意味を取り損ね、「泡沫」化していたからである。

## 16 歴史をねつ造する訳注―ケインズとロバートソンの関係の真相の隠ぺい工作

バーナード・ショーは「常に時代遅れな歴史」の恐ろしさを強調していた。これにも勝るとも劣らない「時代遅れな歴史」の語り部。それが今回の間宮陽介である。「一般理論」第七章における訳注（上三八二頁）にはあ然とさせられる。ケインズとロバートソンの関係を実際は知らない。あるいは意図的にねつ造している。そのいずれかである。

知らないとすればケインズ学者として完全に失格である（この基準でいけば日本の大半のケインズ学者も失格）。意図的にねつ造しているとすれば、それはそれで大問題である。ケインズ全集に書かれていること（特に二六巻）と正反対の主張をしていることになる。そしてその全集を活用しながらケインズ伝の名著を収めているモグリッジ、スキデルスキーも読んでいないということになる。いずれにせよ学者としては大問題なのである。

要するに日本のケインズ学者は世界のケインズ研究の動向も知らずにケインズを語っているわけである。このグローバル化の時代において。

間宮の訳注によると、ロバートソンは「『一般理論』の形成過程で大きな役割を果たしたが、次第にケインズとの亀裂が深まり、ケンブリッジを去ることを余儀なくされた（後に和解）」（上・三八二頁、下線は筆者が付す）したそうである。下線部分が一九四四年のブレトンウッズ協議の従事した時の話であれば特に問題はない。しかし同協議終了後となれば完全な間違いである。ここでは二点を指摘する。第一に、同協議終了の直後から、ロバートソンはケンブリッジ大学の教授となっているので、「ケンブリッジを去る」ことはありえない。第二に、IMF協定第八条の解釈をめぐり両者は大論争し気まずい関係になったので、「後に和解」するわけがない。これをわかりやすく言えば、同協議終了の後、ロバートソンは「次第にケインズとの亀裂が深まり」、しかし、「ケンブリッジを去る」

どころか、ケンブリッジ大学の教授になったのである。そしてケンブリッジ大学教授時代、ケインズの弟子達から陰湿ないじめを受けることになる。

実は間宮はその同じ注で、ロバートソンのことをケンブリッジ大学卒業後、「同大学講師、ロンドン大学教授を経て、一九四四年にケンブリッジ大学に戻り、五七年まで経済学教授を務める」（上・三八二頁）と書いている。したがって、「ケンブリッジ大学」にいた時のロバートソンとケインズの関係はブレトンウッズ協議終了以降のものと大きく異なることに注意を向ける必要がある。もちろん、二人の詳しい関係を知らない間宮なのでその注意が向かない。

となると、意識的であろうとなかろうと、間宮はケインズとロバートソンの両者の関係についてねつ造していることになる。この点は間宮が両者の関係に関し文献考証を全くしていないために生じる致命的ミスである。例えばノーベル賞受賞者ヒックスが寄せたロバートソン追悼文にも言及していない。ロバートソンはケンブリッジ大学教授を一九四四年―五七年の間に務めており、一九四八―五〇年には王立経済協会会長になっている。ヒックスによれば、ケインズとロバートソンの間には、「表面上は和解があった」が、「一時の和解でさえ容易でなかった」。

### ■ケインズの弟子も歴史を捏造

ところがケインズのエピゴーネンは歴史を偽造する作業に忙しい。たとえば、カーンは、「私はヒックスにまったく同意することができない」「私は、ヒックスの見解を正当化するようなことを少しでも見たことも聞いたこともない」という。

ハロッドのエピゴーネンぶりも見事というしかない。「二人の間では、どんな問題についても、意見の一致した

解決に到達することに成功しただけでなく、ひどく紛糾したことは一度もなかった」と『ケインズ伝』に書いてしまった。この二人の間で、「ひどく紛糾したことは一度もなかった」というのであれば、一九四四年七月三十一日のロバートソンの覚書（IMF協定解釈）、ケインズの反論、さらにはロバートソンの再反論の覚書はすべてうそになる。

カーンの主張が正しいためには非常に困難な前提が必要となる。ロバートソンの「国際通貨基金に関する覚書」が存在しないということである。実際にはこの覚書をめぐり、ロバートソンはケインズと激しい論争を交わし、窮したケインズは大蔵大臣に泣きつき、自分が絶賛して署名したはずのIMF協定条文を修正までしようとし、米国にはねつけられてしまった。驚くことに、カーンはこのような経緯についてまったくふれない。これに関するカーンの主張が盛り込まれた著書は一九八四年に公刊されている（一九七八年の講演をもとにしている）。一方、ケインズ全集第二六巻の公刊は一九八〇年のこと。カーンはケインズの懐刀であったことは有名である。だとしたら、IMF協定八条解釈をめぐるケインズの行動の詳細は知っているはずであり、そうでないとしたらおよそケインズの弟子を名乗るに値しないだろう。

再度強調する。IMF協定八条解釈をめぐりケインズ、ロバートソンが烈しくやり合った状況はケインズ全集二六巻に詳しい。また、プレスネル、ドーマル、モグリッジ、スキデルスキの大著にも詳細に記されている。カーンはケインズの直弟子であるのに対し、モグリッジはケインズ全集の編集責任者である。カーンと正反對の説明となると相当の裏付けがないと書けないはずである。しかしカーンの問題点に全く無自覚なのが宇沢であった（この点、詳しくは拙著『落日の肖像』、一四七～一六一頁）。

このような問題の多いカーンに一方的に依拠したのが間宮だった。この三〇年間の世界のケインズ研究の成果を全く取り入れない、あるいはケインズ全集も読まない者が『一般理論』を賢しらに解題する。

不幸の手紙の類なのか？間宮には拙著による警告が届いていなかったようだ。より正確に言えばそれを無視していた（筆者はこの間、ケインズ学の問題点を詳述した幾つかの拙稿を間宮に何度も送っているが何の返答もない）。どうやら間宮は自身の研究の底浅さに三猿を決めこんでしまったようだ。これはギリシャ悲劇も顔色を失う悲喜劇である。今後の間宮の反応が楽しみである。その時の好材料を挙げておく。スキデルスキーの『ケインズ伝』第三巻からの引用である。間宮が世界のケインズ研究の何も吸収していない証拠を提示するためである。

ケインズとロバートソンは完全には和解できなかった。それはブレトンウッズ協議の後の議論に見てとれる

## 17 下世話の好きな訳者

ところで間宮は二〇〇六年に、『一般理論』の余白―ケインズを生かす途―なる、一見、気の利いたタイトルの論考を出している。それによれば、ケインズの『一般理論』の本体よりも、その余白、すなわち、「これまで無視されてきたその余白にこそ、ケインズを生かす途があるように思われる」（『経済セミナー』二〇〇六年二・三月号、37頁）そうだ。

ところが、その「余白」のかなた先に広がる晩節のケインズの言動を『一般理論』体系と対照させる学問的作業は一切放棄されている。これでケインズの思想を語ろうとする。

だから間宮はケインズの重要な点を見違えてしまった。ケインズがプライベートな問題で同性愛者であったことは「好奇の目を離れ、一つの客観的事実として人々に受けとめられるようになる」（日本経済新聞、二〇〇六年一月二二日）そうである。

こういう下世話にはなぜか異常な興味を示す一方、ケインズが第二次大戦後一貫して問題にしていた英国の対米

経済関係、特にそれが最も重要になるのはブレトンウッズ会議―英米金融協議（一九四四年夏―四五年冬）におけるケインズの役割については何も語っていない。ケインズの実像を把握しようとしないので、「好奇の目」の向け先を間違えたのである。これで一体どうやってケインズの思想を語れるのだろうか。この程度の学識なので、間宮が株を「実物資産」、あるいは「債券」のことを「債権」と訳してしまうのも特に驚くことでない。

肝心な話は語らず下世話に興味を示す。凡庸な学者の通弊であるが、間宮もその例にもれない。ケインズを借りれば、間宮は子宮の中に逃げ込んで奥深く閉じこもり、抜け出そうとしない。ケインズ知らずの本邦「ケインズ学」という子宮からである。間宮は典拠に基づく批判の怖さを自覚しなければならぬ。自分で切ったつもりでも、学問上の厳しい批判の糸は、ふりほどこうとすればするほど、ますますからみつく。学問的批判に誠実に応じず、批判をかわそうとして、ケインズのいわゆる「子宮」に逃げた人の背中にはその糸の端はしっかり縫いつけられている。「子宮」は tomb と化するのである。三猿は無駄だろう。さて今後、間宮の沈黙との結婚生活は一体、何時まで続くのだろうか？

## 18 提灯書評に興じる経済学者、経済新聞編集委員

なお日本の学者全般の態度にも注意を払う必要がある。これまでに指摘した問題だらけの翻訳を絶賛してしまう、阿諛追従の学者が後を絶たない。ここでは一例にとどめる。井堀利宏（東京大学教授）によれば、今回の間宮の翻訳書は「既存の翻訳と比較すると、はるかに平易な日本語となっている。また、巻末に加えられている詳細で丁寧な訳注も有益であり、読者の理解度を飛躍的に高めている」（日経新聞、二〇〇八年三月二日）そうである。ここまですぐと井堀は自分が何も間宮の翻訳の問題点を把握していないことを告白したに等しい。たとえば、「丁寧な訳注」

の内実はケインズ・ロバートソンの関係の記述にも明らかなはずなのであるが（上・三八二頁）。

一面、井堀は正直である。自身が「大学院生の時に、翻訳書を片手において、難解な原書を悪戦苦闘しながら読んだ経験がある」そうだ。風雪の重みなのだろう。現在は間宮翻訳を読んで「理解度を飛躍的に高めている」そうだ。しかし間宮の翻訳を読んで、「悪戦苦闘」しなくなったとすれば、井堀はまさしく文盲である。東京大学教授の質を井堀が代表していたとすれば空恐ろしい。こういう教員に東大の学生は講義を受けさせられているのである。かつて吉田茂が東京大学総長・南原繁を「曲学阿世の徒」と批判したことが思い出される。今回も学者の世間知らずぶり、否、今回は学問知らずが明らかである。

#### ■ 白川夜船氏の大新聞編集委員

これに経済新聞の追従記事が加わると、パロディはさらに盛り上がる。間宮訳の『一般理論』に関し日本経済新聞の編集委員・滝田洋一は実に面白いことを書いている。この訳書を垣間見もしないまま寸評を書いているのである。滝田によれば、「経済学の古典が読まれないのは、訳文が障壁になっている面もある」、しかし、今回の間宮訳は「良質な翻訳書の新規参入」であるそうだ。これはまさに「朗報」であり、「ケインズ語から解き放たれた古典は、想像以上にみずみずしい」というのである（日経、二〇〇八年四月六日）。

さて日経新聞編集委員の滝田は今回の筆者の論考を目にしたらどういう心理的反応を示すのか、ひとつ speculate してみよう。ケインズの『一般理論』のキーワードになっている株と債券の区別も、あるいは債券と債権の区別もつかず、さらには投機ポジションの意味も理解できない訳者による今回の新規翻訳書を読んで、滝田が「みずみずしい」、あるいは「良質な翻訳書」と感じたとしたらまさに文盲である。これが大経済新聞の編集委員であるというのは高級な冗談だろう。



まともな読者ならば、今回の翻訳書は少しばらばら頁をめくるだけでおかしい記述だらけの内容であることに気づく。そしてまともな読者は絶望する。「良質な翻訳書」を読めば「英語で読む際の機会費用」から免れるはずなのに、それが裏切られるからである。「良質な翻訳書」は幻想にすぎなかったのである。

一見しても気づくおかしな記述に充ち満ちている訳文を持ち上げる人物が日本の代表的経済新聞の編集委員なのである。こちらの方がはるかに「想像以上にみずみずしい」話だろう。われわれはこういう人間が書いている経済記事を読まされているのである。

こうしてみると、サブプライム問題は思わぬところでも大きな問題を引き起こしたことになる。すなわち、提灯書評、追従的評価に囃したてられた新訳は、サブプライム証券の高格付けが幻想と化したのと同様、たちまちのうちにメッキが剝落する。鍊金術師ならぬ鍍金師の行く末が案じられる。

## 19 むずびーエンロン事件の二の舞で飛び交う「イチジクの葉」―債務を債権として偽装表示

経済学に関するケインズの文章ははつきり言っているに違い。その散漫な記述はタルムード（ユダヤの経典解説書…冗長の意味）そのものである。しかし人物観察となるとがらりと変わる。もちろん経済学の分野でも随所に鋭い警句、麗筆がちりばめられており、含蓄が深い面もある。ともあれケインズ経済学の基本を理解するのに欠かせない条件がある。金融経済に明るいことである。これに暗いとケインズを解題する資格はなくなる。

その点、『一般理論』を新たに翻訳した間宮、そしてそれを解題した宇沢はその条件を決定的に欠いていた。たしかにその訳は一見わかりやすい日本語に改善されている。だが、今回指摘したとおり、内容上、意味不明の訳だらけである。となると、日本のケインズ学者、あるいは経済学を学ぶ人たちは塩野谷親子、間宮と連なる『一般理論』

の翻訳を七〇年間近く読んでいてもケインズの重要な主張は何も理解できなかったことになる。本邦のケインズ学の淪落の嘆きは深まるばかりであろう。

経済学という株式市場も信頼性を保つ必要がある。今回の間宮によるケインズ訳は泡沫企業株として扱われるべきであろう。そのような企業は登録抹消されることが多い。経済学の法廷は厳しく運営されるべきだろう。

### ■枯れてしまう「イチジクの葉」

ケインズ学者の張り巡らす「鉄のカーテン」。それは今回の筆者の筆爆撃で崩壊した。そこに残るのは数片の「イチジクの葉」のみ。今回それを身に付けるのは間宮陽介。いかにも哲学者風の名前である。しかしケインズを借りれば、「きれいでお上品なテクニクはすべて崩壊しやすい」。日本のケインズ学者の恥部をおおう「イチジクの葉」も厳しい学問的批判で萎れる時が到来したのである。

かつてクレマンソーは有名な言葉を残していた。戦争は非常に重要なので将軍達だけに任せておくわけにはいかない。同じく、ケインズを知らないケインズ学者だけにケインズ研究を任せておくわけにはいかない。それが日本の学問的状況であり、経済学の法廷の開場が待たれるところである。

ここまで来ると筆者はどうしてもエンロンの運命と本邦ケインズ学者の行く末が二重写しになってしまう。同社は債務を債権として偽装会計処理していた。それはなかなか巧妙なものだった。歴史は茶番を繰り返す。間宮、塩野谷など日本のケインズ学者は債券という債務を「債権」として訳してきた。したがって債務を債権とする手法の特許はエンロンのものではない。間宮、塩野谷という本邦ケインズ学者に帰属する特許権である。

もちろん両者には大きな違いがある。同じ債務の債権への偽装処理にしてもエンロンは意図的であったが、日本のケインズ学者の場合、何も気づくことなくそうしていた。エンロンの会計処理に関し米国の名だたる大学教授は

ゴー・サインを出し、日本の名だたる学者は間宮のケインズ翻訳に関し賞賛を寄せていた。いずこの国も曲学阿世の学者には事欠かない。

「論語読みの論語知らず」、あるいは「源氏読まずの源氏知り」。しかし本邦ケインズ学者の場合はさらに意匠を凝らしている。本論が示すとおり、「ケインズ読まずのケインズ知らず」だからである。源氏物語にちなんだ源氏名は現在でも夜の世界ではお馴染みである。花、植物にちなむものが多い。そこで今回登場した『一般理論』翻訳者から思いつく、源氏名ならぬケインズ名は「イチジクの葉」だろう。葉隠れの里の趣向からすれば「葉」が適当であり、「雲隠れ」をも暗示するからである。

一見気の利いた、わずかばかりの言葉をうまく並べ、あたかも本質を知り尽くしたかのように語る魔法の修辞で学問の世界を幻惑して名声を勝ち取ろうとする。このような危険な賭けは必ず失敗する。学問の世界には真贋を見極める厳しい視線がつねに投げかけられている。

さて今回のように、厳しい現実を突きつけられた本邦ケインズ学者はどうするのだろうか。自分の書いてきたものに、消音器をつけ、沈黙との結婚を選択するしかないようだ。さりとて学問的屈辱感はぬぐえない。その苦しみは骨の髄からしみ出し、血管を伝って自分が手にする筆にまで吹き出す。恐怖感にかられる本邦ケインズ学者。筆者の一連の研究への反論なくして、ケインズ学者として一体通用できるのだろうか？

さてここまで書かれてしまうと、本邦ケインズ学者はおそらく眉間に怒りの黒い縦皺をよせるだろう。学問上の地獄に堕ちた魂の絶叫を聞くのは忍びないが、危険な賭けにはそれにふさわしい帰結がある。パロディと悲劇の独創的な融合。それが本邦ケインズ学の今日的到達点なのである。

かつて「吉兆」という名の高級料理店は食べ残しのリサイクル策謀において「凶兆」を体験した。世界的会計事務所アンダーセンも消滅した。無常をうたう『平家物語』は経済学の世界でも普遍である。すなわち、「奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢の如し。猛き者も終には滅びぬ、偏に風の前の塵と同じ」。京都の人にもこれが身に沁みる時が到来したようだ。

\* 本論が典拠とするケインズの文献は次のケインズ全集からのもの。 *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Managing Editors, Sir Austin Robinson and Donald Moggridge, London: Macmillan。本文では各巻別に典拠頁を表記する。たとえば二四巻の五八四頁の場合 JMK. 24, p.584 と表記。「一般理論」は JMK. 7 『貨幣論』は JMK. 6 とする。

(本論はケインズ『一般理論』翻訳の惨状について詳述した拙稿、「本邦ケインズ学の貧困―ケインズ 100 の名言』の迷言の起点となった『雇用・利子および貨幣の一般理論』の誤訳(上)(下)」「佐賀大学経済論集」第四〇巻第六号、第四一巻第一号)の続編である)。